多胎をもつ両親の育児と意識

（分担研究：　ハイリスク児の管理に関する研究）

研究協力者：堀内　勁
共同研究者：森　直行

要約：近年多胎妊娠の増加が指摘されているが、特に不妊治療による多胎には品胎、４胎等も多く、医学的、社会的問題も多く、それらが多胎児の家庭を直撃し、育児に大きな問題を与えている。我々はこれらの実態を把握する目的でアンケート調査をおこなった。不妊治療をうけた多胎はやはり品胎の比率が高かった。しかし計画的な妊娠であるため妊娠初期の多胎の受容や、子育てに対する意識は自然妊娠による高い傾向が見られた。反面実際に妊娠期間中の治療や、退院後の子育て期間には否定的な意識を持つ親はむしろ不妊治療群に高かった。それに拍車をかけるのは人手不足、過度の経済的負担、家庭内に閉じこもらざるを得ない状況などが加わり、極めてリスキーな子育てとなっている。今後医療だけでなく、社会的、経済的支援とともに妊娠初期からの心理的支援が重要であると考えられた。

見出し語：多胎育児，不妊治療，虐待，アンケート

緒言：近年多胎分娩の増加が指摘されているが、周産期管理上の多くの問題が知られている。さらに退院後も育児上の問題や、その家族の肉体的、心理的、社会的負担も多大である。今回我々は当院で管理している多胎児を有する親に対して調査をおこなった。

研究方法：１９８８～１９９２年の５年間に聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院周産期センターで扱った多胎１０２組に郵送によるアンケート調査をおこなった。設問は妊娠期間中の問題点、児が出生してから退院までの問題、退院後の問題にわけた。解析は主として不妊治療を受けたものと自然妊娠による多胎とにわけておこなった。

研究成績：回答は４４組から得られた。双胎３７組、品胎７組で何らかの不妊治療をうけたものは１２組であり、そのうち６組が品胎で、平均在胎３２．２週であった。家族構成は核家族が８１．８％を占め、祖父母その他との同居は１８．１％にすぎなかった。年収は５００～８００万円が５４．５％を占めたが、自然妊娠群で５００万円未満のものが多かった（８％，３５％）。

妊娠時の心理的反応は多胎を喜んだものは自然妊娠に多かった（３８％、２５％）が、喜ばないものも多かった（０％、１３％）。驚きは自然妊娠に多く（５０％、８７％）、不妊治療群では多胎の可能性について予測していたことがうかがえるが、妊娠を不安と感じる場合が多かった（３３％、２３％）。

切迫早産の治療を受けたもの（７５％、６２％）、入院したもの（９２％、８８％）は多数にのぼった。入院先は母体搬送によるものが３９％あった。入院期間は２月以上が６６％あり、特に３月以上が２７％もあった。入院時の心理的反応は胎児のため努力する気持ち（８３％，７０％）と、逆に長期安静の苦痛も多い（３３％、４１％）。妊娠に否定的な態度は不妊治療群に多かった（８％、０％）。

出産時に喜び（９２％、８１％）と、同時に解放感を感じたものも（５９％、５６％）同程度であった。今後の子育て（３３％、２３％）、未熟産（８３％、５３％）、合併症（８３％、４０％）等に対する不安は不妊治療群に多かった。生後搬送されたものは３０％で、半数は各児が別々に搬送されている。児の入院中は不安（４２％、５２％）、児の病状への不安（８３％、５３％）が多かった。

児が同時に退院したものは５４％に過ぎなかった。退院を喜んだものは（６７％、８１％）不妊治療群では少なく、退院延期を願ったものは逆に（３３％、１９％）多い傾向があった。但し子育てに対して努力する姿勢は（４１％、４２％）ほぼ同率であった。体力に自信がないものは（１７％、４２％）自然妊娠群に多かった。多胎育児への夫の協力は不妊治療の有無に関連なく、９８％と高く、ついで妻の母７０％、夫の母２９％他の姉妹１５％であり、ベビーシッターを雇ったものはわずか５％に過ぎなかった。核家族化の傾向が強い中でいざというときには家族に頼らざるを得ない現実がある。積極的に協力した夫は（９２％、６８％）不妊治療群に多く、消極的な夫は（０％、２３％）自然妊娠群に多かった。育児のため家庭外の付き合いが減ったと答えた母親は（５８％、５９％）多く、父親は（３３％、３８％）やや少なく、母親にかかる負担は多大である。夫以外の育児協力が得られた期間は退院後３月以内が３４％、４～６月１１％と減少した。母親の疲労感は肉体的には３月以内４７％、４～６月２７％と早期に強くなるが、精神的疲労は３月以内２７％、４～６月４１％であった。育児上の相談は親戚５７％、病院３６％、友人２７％、保健所１１％、双子の会７％であった。保健所からの新生児訪問は８６％だが、役だったと答えたものは３０％に過ぎなかった。病院での健診は８９％と受診率は高かいが、役だったものは４１％に過ぎなかった。

生後１年間の母親の心理では充実感を持つものは少なく（８％、１６％）、全然充実感がなかったものもあった（８％、１０％）。しかし努力する姿勢は同等で（５０％、５０％）あった。。多忙による疲労は（４２％、２５％）不妊治療群に多く、一時でもいいから育児から離れてみたいものは（２５％、２８％）両群で差が無かった。さらに自分の人生設計が多胎育児のため変わったと感じるものは（２５％、１３％）不妊治療群に多かった。大変さのあまり、子供などいらないと思うことがある親も（８％、３％）不妊治療群に多かった。

平等に我が子を愛すことができなければ多胎の育児は極めて困難だが、否定的答えが（４２％、１２％）不妊治療群では明らかに多かった。その理由は小さい子、眠らない子、退院が遅れた子、接する時間が短い子、努力したがだめ、愛情など皆無等の理由があげられていた。

経済的負担が年収の３０％以上が（５４％、２３％）不妊治療群に多かったが、これは品胎の比率が高いことも影響している。

育児を行う上で妊娠中のイメージと異なった点は各児にそれぞれ個性があったこと（２０％）、育児そのものが思った以上に大変であったこと（１８％）等であった。多胎育児の支援のためには育児手当の増額（４１％）、ベビーシッター（２３％）、ホームヘルパー（４３％）の充実、多胎専門のカウンセリング（８％）、多胎育児グループの所在についての情報が欲しい（１４％）等があった。

考察と結論：多胎児の３０％に不妊治療の既往があり、不妊治療群では計画的に妊娠しているためか多胎児を妊娠する可能性も知っていると思われ、妊娠中の多胎の受容はよいと考えられた。しかし実際には妊娠そのものに対する不安、入院中に否定的心理に陥るもの、生まれた子供の合併症に対する不安、育児に対する不安等の訴えも多く心理的葛藤が強く浮き彫りされた。実際に育児が始まると予想以上に肉体的、精神的、経済的負担が大きく、疲労感は明らかに不妊治療群に強くでていた。そのためか自身の人生設計が狂ってしまったと感じ、子供などいらなかったと否定的心理に陥るものも不妊治療群では高かった。また複数の児を平等に愛せないと感じる母親の比率も不妊治療群では高く、今後の虐待や、無視などの萌芽が感じられる。さらに多胎の育児のための人手は核家族にもかかわらず、祖母等の親戚があたる場合が多く、公的・私的援助は少ないく、余裕を持った子育てができない状況である。今後妊娠中からの育児指導、カウンセリングや退院後のヘルパー導入、多胎のマザリングのための育児グループの育成等の医療のみならず社会的、経済的な面を含めて広範なバックアップが必要であると考えられる。

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院周産期センター
Perinatal Center , St.Marianna University Yocohama City Seibu Hospital

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:近年多胎妊娠の増加が指摘されているが、特に不妊治療による多胎には品胎、4 胎等も多く、医学的、社会的問題も多く、それらが多胎児の家庭を直撃し、育児に大きな問題を与えている。我々はこれらの実態を把握する目的でアンケート調査をおこなった。不妊治療をうけた多胎はやはり品胎の比率が高かった。しかし計画的な妊娠であるため妊娠初期の多胎の受容や、子育てに対する意識は自然妊娠による高い傾向が見られた。反面実際に妊娠期間中の治療や、退院後の子育て期間には否定的な意識を持つ親はむしろ不妊治療群に高かった。それに拍車をかけるのは人手不足、過度の経済的負担、家庭内に閉じこもらざるを得ない状況などが加わり、極めてリスキーな子育てとなっている。今後医療だけでなく、社会的、経済的支援とともに妊娠初期からの心理的支援が重要であると考えられた。